

漱石と世界、響きあう 内外の研究者ら一堂 国際シンポジウム

夏目漱石は世界をどう見ていたか、また世界で漱石はどう読まれているのか。漱石の没後100年の命日だった昨年12月9日をはさむ8～10日、横浜市内と東京都内で「夏目漱石国際シンポジウム」(朝日新聞社、岩波書店、国際交流基金、フェリス女学院大学主催)が小森陽一・東京大学教授による基調講演を皮切りに開かれた。今年2月9日、漱石は生誕150年を迎える。

■時事盛り込み、読者の意識に作用 小森陽一・東大教授が基調講演

漱石が亡くなる1916(大正5)年の元旦から朝日新聞に連載したエッセー「點頭録(てんとうろく)」で、2回目から「軍国主義」と題し、第1次大戦について論じている。個人の自由を重んじる英国で強制徴兵案が成立したので、ドイツの軍国主義の勝利だと漱石はいう。新聞読者に、ドイツ帝国の成り立ちや漱石の半生と重なる明治時代と大正5年のこの一瞬を重ねあわせて読ませる。漱石の文学理論を踏まえて書かれた文章だ。

漱石は「文学論」をロンドンで構想し、朝日新聞で専属作家になる際、文部省への絶縁状のように国費留学の成果として単行本にした。数式を用いた論文は難解に見えるが、要は読者論的な文学論。知覚的、観念的な情報が、読んだ言葉から読者の頭に入ると、感情や意味がその記憶の中で付着し、文学的内容が表れるというものだ。

新聞小説は様々なニュースとともに掲載される。「ころ」には、利子の半分で十分暮らせる「先生」の境遇が描かれる。明治維新以降の土地私有制、日清戦争の公債、金融資本に寄生可能な生活、戦争遺族家庭への下宿……背景に明治維新以降の激動が刻み込まれている。こういう社会構造の転換を理解し、明治天皇の死や皇太后の病を記憶している読者が、明治の終わりを意識して読むことになる。

「門」の冒頭には伊藤博文の暗殺が出てくる。御米(およね)が「なぜ殺されたか」と尋ねるが、事件は1909年10月、実行した安重根の死刑判決は翌年2月半ば、連載開始は3月だから、読者はすでにその答えを持っている。あえて設定を半年前にすることで、新聞読者に、知っていることを小説を読むプロセスに掛けあわせる。小説では、書いたことの2、3倍もの意味作用を、読者との応答関係の中に作り出すことになる。漱石は、「文学論」で構想した読者の意識の動き方に、過去の新聞報道の情報をどう入れ込んでいかをも意識していた。

■英・独・仏文学読み、方向模索

シンポジウム2日目は「漱石は世界をどう読んだか?」と題し、外国文学から漱石が受けた影響や社会における漱石イメージの変化について論じた。

徳島大学の田久保浩教授は、漱石の初期の小説「草枕」について、「語り手の設定」「風刺的作風」など英文学の伝統から学んだ創作手法によって「極めて巧妙につくられている」と述べ、漱石を英文学の伝統の延長線上に位置づけた。

一方、フェリス女学院大学の野英二郎教授は、蔵書に残された書き込みや傍線などの痕跡から漱石の読書体験に言及。英文学書籍35%に対し、独、仏など大陸文学書籍が47・3%と上回るというデータを紹介した。「作品の着想を得たり構想を展開したりする契機にした」と大陸文学から受けた影響を述べ、「同時代の作家たちと斬り結ぶかのような読書体験を通して、自身が進むべき方向を模索し、あるいは見定め、確認していた」と語った。

東京大学の林少陽准教授は、漱石文学における漢詩の考察から唐宋古文の影響を取り上げた。

22歳の時に書いた紀行文「木屑録（ぼくせつろく）」の中の一節に「以文立身（文を以て身を立てる）」と漱石が決意を示す部分は、「後の小説家ではなく、唐宋文や漢詩を書くような文章家の意味」とする解釈を披露。学生時代の漱石にとって「古文」とは漢文のことであり、唐宋古文派の荻生徂徠らを「簡潔で句が締まっている」と評価していたとも話した。

漱石の孫でもある学習院大学の夏目房之介教授は、祖父のイメージについて語った。弟子に伝わる「優しく思いやりのある師」という一面と、鏡子夫人の「漱石の思い出」に語られる「怖い夫」というような両面が「同在した」と推察した。近年は「漱石神話」を女性目線で裏返すことに抵抗はなくなっているとし、マンガに登場する漱石像は、社会に定着したイメージに少し違和感を与えたり、二次創作など多層的になっていたりすると述べた。

名古屋大学の飯田祐子教授は、漱石が初期の作品から「明暗」に至るまで繰り返し描いた家庭内の夫の問題に着目した。

稼ぎ手としての役割が求められた明治時代、「野分」では志のため低収入の「夫未満の存在」として表現し、「男性に違う生き方があることを主張した」とする仮説を述べた。「行人」では、恋愛と結婚を結びつける近代家族の規範に一石を投ずる登場人物を設定したと分析。「道草」では、稼ぎ手として「物品」扱いされる夫の不安感を表現していると語った。

■米国・ノルウェー・韓国・中国… 翻訳進み、普遍性

シンポジウム3日目は「世界は漱石をどう読んでいるか？」と題し、欧米や東アジアの日本文学研究者が漱石作品の翻訳をめぐる問題や、海外での漱石作品の受容について語った。

米シカゴ大学のマイケル・ボーダッシュ教授は、「三四郎」に出てくる「ダーターファブラ」などの言葉を挙げ、「漱石は自分の作品が翻訳されることを拒否した」と指摘。翻訳者として「これからも続けて漱石を裏切るつもりでいる」と皮肉っぽく語った。

米ボストン大学のキース・ヴィンセント准教授は、言葉の「響き」をテーマに、硬くはじける音感の「K」音について解説。正岡子規の「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」という句や、「K」という人物が登場する漱石の「こころ」に言及し、「彼ら（子規と漱石）は私

たちに言語の物質性にまで注意を払うように要求する」として、音感まで含む翻訳の奥深さを語った。

オスロ大学（ノルウェー）の安倍オースタッド玲子教授は、「明暗」について、「三人称過去形」を貫いた点に注目。日本語の文体実験だったが、米国の日本文学研究者の批判的な見方にも触れ、「世界文学という視点から日本の近代小説を考察することで、私たちの読みを国文学的な文脈から解放できるのではないか」と話した。

世宗大学（韓国）の朴裕河教授は冒頭、「この100年間はアジアにとってそれほど幸せな時代ではなかった」と述べた。「坊っちゃん」を訳した韓国知識人の歩みをたどり、植民地支配を受けた韓国における日本文学の受容の複雑さについて話した。それが、90年代以降、韓国の読者にも漱石が届き始め、今年までに漱石全集14巻が刊行されたことについて、「日本文学者の手を離れて、普遍的な文学として読者に近づけるようになった」と説明した。

寧波大学（中国）の李広志准教授は、中国では漱石作品の翻訳は「吾輩は猫である」が最も多く、少なくとも19種類あることを紹介。大学生の頃に「猫」に夢中になったエピソードを語った。自身に取り組んだ「猫」の翻訳について、有名な冒頭や「後架」（便所）という言葉はどう訳すかという苦労話に、会場から笑いが起きた。中国で漱石が多様な人々に愛されている現状について、「千人の心の中には千人のハムレットがいる。百人が漱石を読めば、百匹の猫がいる」と締めくくった。

■「時代や国境こえ人々結ぶ」 エッセーコンテスト最優秀のチャベスさん

シンポジウム3日目の冒頭、日本語を母語としない人を対象とした「漱石国際エッセーコンテスト」（朝日新聞社、岩波書店、国際交流基金、フェリス女学院大学主催）の表彰式があった。

最優秀賞を受賞したカナダ出身で松山市在住の高校の英語指導助手、ステファニー・エリカ・チャベスさん（27）＝写真、北村玲奈撮影＝が代表であいさつし、「漱石の作品は、時代や国境を超えて人々を結びつけている。文学の持つ力を私は信じています」と述べた。「私の夢は翻訳家になること。世界の人々をつなげることができると信じて、夢の実現に向けて日本語の勉強をがんばりたい」と今後の抱負も語った。

選考委員を務めた熊本県立劇場館長の姜尚中さんが選評を述べた。漱石を「日本文学、日本学を自分の専攻にしていくときの一つの窓」と表現し、「自分の生きている現場の文脈の中で漱石と出会っている感じがした」。また、「（日本人が）あまり読まない小さな作品を大切にしている人が結構いた。スタンダードではない部分に漱石の本領があるかもしれない。日本語を母語としない人々が逆に発見して、日本の読者に教えてくれる」と語った。

式では、漱石アンドロイド（人間型ロボット）が初めて一般公開された。孫の夏目房之介さんの声で、「夢十夜」に触れて「百年待っていただいて、ありがとうございます」と話すと、会場から拍手が起きた。自己紹介の後に講演「私の個人主義」を朗読した。